溫故日録

二

へ 5
5631
2

へ
5631
2

浅草文庫

温故日録巻第一

睡月

三始　歳始　日始　月始　正月為端月。其一日為上一日。亦云三元歳之元。時之元。月之元。玉燭寶典鮑宣傳云。三始。如淳注正月一日為歳之朝月之朝。日之朝也。三朝ことゝなり支木立春ニ顕朝卿哥云

改年　荒玉月　さすらへの三年あらたまり行かとしても春也又荒玉の月なりとも萬葉なるあまつよりあらたまりて云宮ばへ云宮ばへ

當年代事よりて春也但句所よりて

新年 年立 明年 迎年 古年 去年

去年ことしといふをこしよ春せ今年とえらハ雑也

唱星 朔日 四方拝の事也四方拝といふ事ハ元正の寅の時にすゝかに属星を唱へ天地四方山陵を拝しおはしく年災をも払ひ宝祚をも祈らされし儀にそ侍りや清涼殿の東階のまへ庭のかに御屏風をたてそめくらし其中に御座三所成まうけ其前にちいさき机を置て香花灯なとをそなへさせ給ひて御拝の儀式ありむかし侍臣なとも四方拝をハ志侍りしや今ハ内摂関大臣家なとの外ハさる事もおこさぬよしきこえ侍る 仁和五年正月寅

天地四方属星山陵を拝しの由宇多の御門の御記にのせられたる盤觴にはあらてまさ皇極天皇雨を祈給ひて南淵の河上に行幸ありて四方を拝し給ひを祝ハ雨五日まてふりきたるよし日本紀にのせられたるハ是なとをやもしめもはしめなん

其ハ上属星を拝し災難をのそく趣天地瑞祥志といふ書にみえしなり 公事根源 雨雪之時ハ於弓場殿有此事猶江次第ニ委二条ノ大閤御所の年中行事哥合に云

すへらきの星となへつるその上にひらのとけき表ハこゝにそあり

と詠するは當年の御本命星を先と唱へ給ことなへの事かやとおほしいかゝあらむといへり

暑蕷 白散 藥子 是ハ元三の儀なり御殿にてをこなはる 主上晝御座にて出御なりて 生氣の

方に清衣をまとひ冠の清なる御はとふかさを先さ
陪膳に典侍典侍藥頭も生氣の方に色を著す
此時先御厨子所に御齒固を供す命婦義人
侍送て典侍侍次第に義人前ますをい
女房いまさ嫁せざるをとゝめて是に用新事を
屠蘇は女児ものしとゝふ本文にはあらず其は女
女房擬てまゐのまゝ
らすゝてはゝのれ帳に先屠蘇
典藥に勧めて清藥をとりはをを一献に先屠蘇
を酒小入さ業にまゐ次に銀器に入る藥
の頭ものてもいとん小清さゝふ主上座をゝせ給て
庭御殿に南の戸より入給御ものの東
のかゝれ戸にひゝくあせ給は陪膳御盞に持て
まゐす是を屠蘇を東に戸に向てのゝ由本文

ゝれにや次に女官小返ゝは是後取より
きるとにや一日、四位二日は五位三日は六位に藏人なり
清をゝれ日奉行に義人交名をきり奏に
ゝゝて殿上に柱にをすゝ二献ゝを
神明白散を供をしゝは清に後取の人に給ふ
事を大根をゝふ女義人給りて扇ふすゝ是
を元日は人ゝ精進のゆゝなりと江次第にゝ
三献に度齋散に供を記御藥に儀は三ケ日
三日に清ゝをする銀器に入り
指小付て御額并清耳にはをる
右に第四の指をかゝめてをゝ是は藥師に形
相ゝゝ給にや此業に儀式は五十二代嵯峨天皇
弘仁年中にはゝめる一人是をのゝれは一家に
病ゝ一都小見をのゝぬは一里に病なゝ此日

出産功能ありきと云事 根源
異朝来由ハこれハ茱萸花記云屠蘇酒昔人居草
菴除夕遺里人藥令嚢浸井中元日取水置
酒樽名屠蘇飲之不疫云云年中行事哥合ニ
年ごとにもちゐるめ初る菓子ハわかえだにうんきをうためとも

齒固餅鏡

源氏 初音 れ巻をよんでくらめ てきちゐ

かぐらをさいさうりよせて千歳をかけていのり

齒固ハ元三の日の事也齒ハよろしひとよみて齒をかたむ

れ心也高器六本小折敷をすえ一ハ臺ニ餅六根橘

を盛也此餅ハ近江ハ比叡山の麓ハ鏡山の哥を詠るゆへ花島餘情ニ

ふるとしのはつ

あしたのやかれをとそてそうんゆう高ふ

此哥ハ古今集ニ河海抄ニ委略之 此哥ハ

古今集よりこれハ今よりハ千歳のはつこれ所也云云 高器

と云ものハ白き板ハ上小鼓の胴のごとくなる柱を一尺

余よりもん中よりたてゝ上ハ丸き盆也盆ハ口ひろ丸ハ

也たとへハ如此也火切と云在所ハ野洲ハ下ハ近江

也云里の内也今ハ絶くに田の名とかゝる又伊勢物

語ニ云ふるゝ雪つもるとよ高杯真名本愚

見抄云高土器と書也土ハ土ハ惟清抄ニ云

むかしハ土ハ作ふかやきもの惟清抄ニ云

れ調のかたやうもの物也今業云異朝ハ祭ス神

供をのせるものと邊豆とハ豆とハ物ハ日本の

高杯也清ハ御贄と云義也みうりてしと祇

泊ものたてゝ菴苴日本紀 源氏よおりんべもいてう

堀川次郎百首ニ後頼元日ハ哥云

夫木第卅二ニ源中正元日の哥ゟ

子代もそも京をゆくへてあしたんこいとふかきれりちるさくら

氷様 朔日 氷れたることもいてり 流布 公事根源云

氷様、宮内省ゟ去年氷室おさめらるる

氷様を今日節會に供ぜらるる奏聞さる厚

さ薄さいろ程にすゝ法ゟ行るまで二尺に奏一寸

其ためしとて石ゟ氷池風神に祭をなし氷のおけくわゝ八聖代

の験氷のあれハ凶年ゟて行るニハ氷に御祈とく

大法秘法を行ゟ今日もゟ氷てめた

きゟ氷にあり氷をなるためゟけすんゟ

のふんさいゟて行ゟ氷池ニハ氷をこゝろ

をふとゝる年ハきれゟるゟいきれゟの少氷めくゝを

年中行事哥合の年ゟ事氷室に所ゟの記

腹赤贄 同日 腹赤に贄として魚を筑紫ゟ

昔八鱸て節會なゟ供一ゟ腹赤

に食様とてくひゟ取渡一てくひゟ

都のきゟゟきやゟる行ゟ景行天皇に御宇筑紫

の國宇土に郡長濱ゟて海人是を行ゟ其

後聖武天皇に御時天平十五年正月十四日大宰

府ゟ毛を奉ゟ毛ゟて年毎に節會ゟ

供へきゟ定置ゟ元日ゟ奏ゟ

ゟ遅參なゟ八七日ゟも奉ゟ腹赤ゟ

まんとゟ魚に事也 公事根源

國栖奏 同日 國栖笛 國栖哥 笛 國栖奏ゟ是

吉野に國栖人の事ゟ應神天皇十九年十

月ゟ吉野の宮ゟ行幸ゟ一時國栖人參て一

廻酒をゟて哥をうたひまくすゝ山のこの

を取てくひ又かの紙包て名をハ毛彌(モ)となつけて参
味をとてくひけるとや吉野の川上にあそて鮎をは
しく谷ゆくりけるに所なきは路のさかしく候ゆへ
に常に来朝する事不叶とあんやける其後ハ年毎に
参て年魚やうの物を献(タテマツリ)けるとかや今の國栖の奏
とて哥を謡ひ笛をふきけるハ吉野より年始に
参るといふ也右ハいにしへも公事根源にえ白節(セチ)
會(エ)の前に行る注之取要記之其上ハいつとの節會の
ませは誰もおほつかなくおもはれし 抑此節會ハ天子紫宸
殿に渡御ありて群臣百官酒を給く宴會(トヨノアカリ)を催し
持統天皇四年正月に公ごとを内裏にめしてとよのあ
かりするとあり宴會と書くハとよのあかりとよめ
大かるのせちゑの名にて候よや豊明(ホウメイ)節會にハ加へさる
つくられ神武天皇の御宇にも 群臣共流をくミて酒於

一事ハ日本紀にみえたり是たしかなる事の發(ハジ)まりハ給ひし
中へきれ光仁天皇寶亀四年の春よりハ五位以上に
ぬすめを給ひきわ今もさやう
の心にて事ありて禄を給(タマハ)る事也

初鳥(ハツトリ)　元日の暁の鶏のこゑ
音也　流布　夜分也

筆試(コヽロミ)

暦開

門松　門毎立(コトゴトニタツル)小松ともいふ
一時宿を巨旦(コタン)将来(シヤウライ)に素盞烏(ソサノヲ)尊(ミコト)の南海へかよひ給ひ
ず蘇民(ソミン)将来をかりのやどとも、しなきあ
巨旦(コタン)をころし其家をなからさる是を後の世まて

のちのことなれども巨且が墓のよる生たる松紙
年代始より門に立る此事晴明が簠簋内傳ハ
ハ有れども一条冬良公の御説ハ松ハ千年をち
きり竹ハ万代なれちなる物なり然ル年始の祝事
ハ一ツ云
ことをなして行るべしと云
畧記之ハ説を仰き行くべき歟

年越而

若水 立春日隨季 拾芥抄

包井開 若水と云
事ハ去年御生氣の方の井を點じてあらたし
て人くませもちて春立日主水司内裏に奉きて
朝餉して是なきことなり春立日是なる
奉きは若水とやう年中の邪氣のうとと
ハ本なるまたは孝人是を供すと江師匡房卿の
次第にはそ若水なのむ時呪をとなふる事あるとみ
えたり公事根源是をたくみ井ひくくらもいふまり
是立春の事也連哥にえ日といふ人あまたも爾
之袖中抄にも云
うちなびきをふる春の井よりむすひそめ
わかなとは立春の日のわかなのはやきにたる水を
いふ也素内ちかの人ハえ日にまつるよりひる事と
賀茂の御所にはとよて朔日ふなをもわかなと事
なるとは立春ふなすくるとの事なり
堀河院の御時に立春の朝に御前にて今日の心
をよめと宣旨ありきまは後頼朝臣のよめる
千載第十八
ちはやふる神のみかきの水なれは
以上是顕昭の説もかくのごとくあり又寶治二年百

首尾ゝてまちうきる時年内立春こゝふ事を為
家ゝ
彩葉抄今雑上三八
氷ゝけふきゝ此年ゝ
此年の内よとよるふくもちゝ
ひぐゝをそゆくのゝ或へえ日よ立春ゝ
ふゝす　若水は年と春ゝ
ゝ立春ゝ
時ゝ歳且ゝ

初夢　立春ゝ朝乃ゆめゝ西行家集ニ立春ゝ朝をゝ
ゝ春ゝ

凍解　氷ゝひゝと
ふゝ春ゝ

氷流　只流ゝ氷をゝすゝ
ゝて乃神ゝ冬也といゝ

氷消　氷隙

東風　月令ニ立春ニ東風解凍とあれハ立春ゝ所ゝ
ふゝ春立きゝ東風やゝ
ゝ但三月ゝ渡

若菜　七種　内藏寮并ゝ内膳司ゝ正月上の子日是
を奉ゝ　寛平年中ゝ始ゝ延喜
十一年正月七日小後院ゝ七種ゝ若菜を供ス又
天暦四年二月廿九日女御安子乃ゝ若菜
ゝ由本子部王ゝ記ふゝ若菜ゝ十二種供
ゝ其ゝ若菜　繁蔓　芦
芹　蕨　蘆　葵　蓼　蓬　水蓼　水雲　松と見
ゝ此松の字ゝ事白川院御時師遠ゝ清尋ゝ
ゝ若松と書ゝ
ゝ松ゝ
上皇被御ゝ尋常ハ若菜ハ七種の物ゝ
蓴　繁蔓　芹　菁

御形 須須之呂 佛座なり也 正月七日ハ七種ハ菜羹と食とれハ其人萬病なし又邪氣ハのぞく術なり公事根源

十二種 若菜ハ 蘭 苔 蕨 薺 拾芥抄

芝 蓬 水蓼 水雲 菘 芹 ニあり七種ハ前ニ同じ菁ハかふかと拾芥抄ハ又繡とあり

や是今夏小書ハ皆連哥ハ書せて春小冊ハ多くあり註ハ記之事也其外を書分ける

ことハのなりさもなき其季ハ四季ハ別

一他准之若菜なりハ野ハ摘ハ正月上子日又正月七日ハ八雲 正月七日ハ

数日ハ正月なりをすハ或ハ寄あるハ七日

ハ後ハもおなじくなりの連哥なり雪白ハ七日ハ事

よさ如也又ハ一 新式抄 或抄小

今春ハ雪ハ降れ消まんとこそ思ひ

かのごとくの數の哥ハ云 但世寄ハ引ハ哥ハ歌枕

ハ紙注ニ云ハ抄ハ云ハ引ハ哥ハ歌枕

とことなきハ云ハ哥ハ雪なし云ハ

ハ云ハ也心ハ光法ハ

若菜駈 ハるを云ハ

しる事也 藻塩草

磯菜摘 海菜ハ海菜と云ハ春也

朝菜を摘

菜摘 為春 新式菜

こそりハ新也

惠具若立 惠菜摘 惠具ハ

為ごとハ女菱を摘ハ

ハすハ草ハ水辺小ハ

云と云儀あり云ハ

ハ芹ハ小川ハ

八ち但なき文くゝしくわさしめすして物の異名
ともあるゝさしたるのゝうりさは別ようきる事さた
きこ一定よあしに後頼朝臣ハわれと仲實朝臣う
ちくはたくしてまるる所
とうこれ式つかふるる所これくもとつうりくてもてこれをめそ
かへ
心さしぬるれみさしたこるあて いるよゆもりてわしふれやうか
今云世所ハ名くと名ことよりうかへしいせうとうりる名と
月和とりうう童蒙抄云名くこハ人の名草なりう又
名くとかもる所一方葉よせうとうあうされて名くこうう
とくひうるゝ名とうくこうう 袖中抄 畧ノ記ヲ
新撰六帖其外代くに集よりある所これ所とゆえこうう
子日遊 初子日 小松引 子日松
初子の日ハ若きを求ゆるこれゆくなるものを

此ハ万葉集ニ家持卿に哥なるふや此玉箒ニハ哥
ふ草ニ子にひに小松をひくしてこ求ようたくうう
四舎に家ニ正月の初子の日こがひもうるをとをとを
事と袖中抄ニ委くくうう公事根源ニ云むう
人こ哥くこ出くこ子の日ふるこて松を引きる也朱雀院
圓融院三条院なこの御時ニこの遊ことをきうこや
中ニ圓融院のこの月さ也ふるに寛平元年二
月十三日に事也路に行ハ御車こしの紫野を
く敷て上皇ハ馬ニよめされをう左右大臣以下皆直
衣ニて殿上人ハ布衣也懐に屋をまうけ慢を引
ゆうこ小庭をうこて小松をひうと後拾こう籠物
ひつ檜破子やうの物をなる人こ和哥を献ず
其時に序者ハ平兼盛こうや清原元輔曽祢好忠
なくこ哥人とうこて彼時の哥なくこ

代々集ニ入たる人重て引かんとす云々記
云正月子日登岳遥望四方得陰陽靜氣除憂
惱之術也云云又同記云正月子日引小松延齢
年ノ云云圓融院ハ二月のみ日ハ人ハ引ぬ
こしてう昔ハ正月ハかきすとえくう
夫木ニ二月ハ日ハ哥数首えくう

卯杖　卯日　御杖　卯槌　初卯杖

持統天皇三年正月ハ卯日大学寮ハ是
奉ル由日本紀ニ有仁壽二年正月ハ諸衛祝杖
を献して精魅を祓ふ是を鬼魅
祓心ちなり作物取ハ
とは岩ねの中ハ御生氣の方ハ獣をたくらて卯
杖ふありむれとハ生気東ハ鬼南ハ馬
なるこ一臺盤所ハをとる延喜式ハ正月ノ卯日

衛督以下參て清杖を奏する儀ハ
を五尺三寸たくまこうて二束三束ハゆひ
清杖とハ由尺くうり　公事根源　光源氏物語
きゝ毋ハ卯杖ちもあり細流云卯杖と同一事也
年中の悪鬼を追也糸所ハ内裏ハ
杖物也江次第二日絲所進卯槌藏人取之結
付畫御帳懸角柱副立細木爲柱槌末出
五尺許可用桃木又四角可削近代ハ也失
次第　内裏ハ小かきすまの諸家ハ皆ハ
相をくをう祝ひの杖とも哥ハ桃椿を
ハ云々きる杖也延喜式舍人式ハ正月上卯ノ
月ハ清杖小桃梅各六束云云卯杖卯槌大くハ
同やうにいさうハ其姿もかはるなる一糸所ハ
献するを槌也糸ハ杖ハ何と同

時に献ずるとハ是んとくろう精魅をさへぎる邪氣をむらふ事
もおなじ挾作物所細流に金銀細工の剪なるべし

白馬節會（アヲムマ）

七日此節會の事ハ大方ハ三日なるとあり
おなじく元日ハ氷の様をうかの贄御暦なとと
ある品よりてそれするつゝく諸司の奏といふなりそれハ
兵部省より奉る御弓奏それより内弁も奏聞
するやうやう外日にあつてハそよふも諸司奏とあへし
卯杖の奏あるによてしるしまする附けてし御弓奏
候哉と仰す天皇の射多羅繋ハ其長七尺五寸
なり弓のうけも七尺五寸に放ち是識としてハ
とまや白馬の節會をあらひ青馬濃節會
とさりし也其故ハ馬ハ陽獣也青ハ春の色也是より
よりて正月七日に青馬をミれハ年中の邪氣をのぞ
そくといふ本文あり仁明の御門嘉和元年正月

豊楽院にわたりまして青馬を見給同六年正
月にハ紫宸殿にして御覧ぜられハ此馬の事記
記に春を東郊にむかへて青馬七疋を用ゐるとあり
七ハ小陽の数正月ハ小陽の月也又十節記に白馬
を馬の性の本元天に白龍有地に白馬有之天の
勝ハ龍や地の勝ハ馬や人の勝ハ亀やとや本
文もありて今の節會にハ三七廿一疋をひかるる
是ハ三ハ三才にかたどり七ハ七白にあつるよし寛
平の御記にのせられたり今日の毛ハその奏に
皆あし毛をとりけるを是白馬なりとしるせるなり儀式
なくしハ大かた元日におなじ其いはれ事われ記
すも不珍やうなれバ書のせん天武天皇十年正月
七日に御門小安殿におはしまして宴會の儀を
是や七日の節會の始なるべし　公事根源

人月　七日也　正月一日ノ為雞　二日ノ為狗　三日ノ為猪　四日ノ為羊　五日ノ為牛　六日ノ為馬　七日ノ為人ノ日ニ色きさらのをとこの哉　宗御

御講　八日　是ハ大極殿ニて八日より十四日まで七日ノ間寂勝王經を講ぜられる所なり

ゆゑに此經をもつて分國家ノ護持する功能あるなり

是て慈恵ノ年ノ始ハ先講ぜらるゝ　天平元年十月より大極殿にて講ぜらるゝ　天武　天皇九年五月より始て金光明經ハ宮中にて講ぜらるゝ　是ハ可中ノ極武の時宇　延暦廿一年正月よりかやうに年ノ始ハ成ぬ　公事根源　延喜式四十六左右衛門式ノ委哥ハ

[illegible]

[illegible]

縣召　十一日　縣召ハ外官ハ諸國ノ任ぜらるゝなり

ゆゑに外國ノ人を召て任ぜらるゝ事をいふ　外官ハ諸國ノ任ぜらるゝ事をいふ

名ばかりや其作法ノ筆ノ天臣參て御殿ノ加庇にて事を行ふ所ノ文なとを多行りて

大間よりかゝる屏ノ内にて行ふ　執筆ノ雜儀にて家ノ口傳流ノ故實共様々ふ行ふ事

なこ筆ノ大ぶせちゑ官奏叙位除目を八四ケノ大事にて有職ノ家ノ殊ノ大なる一名

替國替　各國替　快滿　更任　任府　返上なとふ

ゆ文色ノ数を不知おかよて此除目ノ法をてこの知

事共八十年ノ学ノ事きはめかゝ百丈ノ所ノ法

のかゝるさまハ先達より不習して輙ク行ふ事
なるんや然ハとて後昆の為に捨事な
られ式日ハ十一日より始て十三日まで三ケ日なり景
行天皇の御宇武内宿祢を棟梁の臣となる
是官職のもとゐ孝徳天皇大化五年より八省百
官を被定それより先ハ大臣大連なとゝ号あり
き文武天皇大寶より淡海公不比等より勅なりて
律令定官位階の事とのせられまてら其後
おのくのもかゝ官もとゝのへらるゝ職とも是を
令外の官とハやうや但内大臣中納言ハ大宰より
以前よりの号なるまゝ共官位令にのせ
す定て故ある事なんし京官除目とハ京
よりの諸司を肩と被任是ハ井中の人より友を招
公卒根源　除目とハもとより官を除去て新昇進

する義也ぢよれ音なれ
ふ弦名能舞引拔
新業
ゆるさるゝ人ハ名ゆゑと今多かゝく
踏歌　十四日夜也　頭挿綿　踏哥とゝふ正月十
四日ハ男踏歌の事にて行しを行ハ
女踏哥也それハ十六日なり光源氏ハ物語なるに
もおのくハおとこ踏哥ハ事を下行るやたる正
月十四日十六日ハ月の行なるまゝ京中ハ男女ハ夢
ゝ物ゝふ弦多ゝ行たるく年始ハ祝詞をつゝりて家
弦まゝをもとすれ行故ゆ踏哥行ハなり四代天
武天皇三年正月より大極殿より渡御なりて男女
ゝ事なく宵夜踏哥の事ゝとゝ行ゝゝ然ハ月
のたゝゝ孫ゝも鳥羽玉ハ宵の夜よりもまゝしや四十代女天武后持統天
皇ハ御時ハ漢人踏歌とゝゝ唐人踏哥

はゝ寸聖武天皇天平九比ハ踏哥ノ儀ニて禄ハ給ふて仁義礼智信ハ五文字を短尺ニ書て是を人ゝ〳〵ひ仁ノ字ハ赤ゝ〳〵ふ義ノ字ハ紫ふ礼の字ハ綿とふ智ハ布を行ノ信ノ字ハ段常ノ人ゝ琴を引ゝ〳〵ふ布ハ行いと無ハ事ハ也や又おゝ御時踏歌ノ儀式ハ常の事なれハ今更記ハ不及踏哥節會ハ会をハ事ハ也と宣命ハ譜ハよ

（續日本紀）

ゝ〳〵き年ハ始ハ五十代桓武の延暦十四年ノ正月ハ詩ハ作りてうたふ

ハ男踏哥ハ事なり今ハ代ハ行ハ八十六日

ハ女踏哥ハ公事根源中略かさしノ綿ハ河海抄ニ云踏哥ハ人以綿ノ造花巻ニ冠額ニ也号ス高巾子ト云云孟津抄云綿をもつてかづく西宮裝束抄ニ云高巾子ノ之六位以綿ノ裏面云云年中行事ニ合ハ

ハ女踏哥ハ

十六日をハ女踏哥ハ云ハ舞妓ハ故ハ男踏哥ハ

ハ十四日ハ殿上地下ノ四位已下の輩ハ

正月十四日五日ハ京中ハ遊士ハ

ハ小弦ハ祝詞を作てうたふ舞

ハ事おうれハ未世ハ千歳ハ万歳と云て逸興ハ

催ス事ハ此等ハ餘風也六十四代圓融院ノ

天元六年正月男踏哥ハ後ハ記録なとふも

不見なり其儀式ハ西宮抄ニ見えたり　花島
万水一露ニハ拍子をふと哥とうたひきり故ニ踏哥と云といへり

御薪　十五日　是ハ百官悉く薪を奉て宮内省ニおさめ
りたり其数多ハ延喜式ニ見えたり　公事根源
年中行事哥合注ニ云たとへバ是をたのかさを
ぬすみたんとめし天武天皇白鳳二年正月十五日
百寮諸人薪を奉る事なり是やはじめなる一説
百姓代りの法をたてこの所ニ所ニよりたきり
支木ニ卯杖哥云為家
みつの所ニ卯杖をうつ春いとくゝ老
ぬ

賭弓　十八日　是ハ天子弓場殿ニ出御して弓を射
給ふ也仲春ニ弓を引事ハ礼記ニ見
ゆ也ハ堋ニ的をかけて左右近衛左右兵
衛四府の舎人ニ左右の大将射手

で奏せらるゝ勝の方ハまけの方ハ罰酒をとるなり
勝の方ハ舞　樂ハ奏せらるゝ近衛の官領して
あるべき事なれ共後大将射手ハ饗ハたまふ是ハ
かつがつとふかつがつあるべし大将ハ左右なく参
内せぬ事なれ共ハ左右なくまいるとや又殿上
の賭弓とて陰所ニ弓を引ぬる事をそなへ
殿上の侍臣ともに射給ふ　公事根源　清和天皇貞
観二年正月十八日始之　河海抄　猶江次第ニ委

梅枝歌　場ごえハ催馬樂を
うたふ事　河海抄　青柳歌　大芹歌
なりもおなりく催馬
樂ハうたふ也
落梅曲　笛ハ吹也

丈木ニ大宰大貳高遠卿哥也源氏梅枝に
心ありて風のよくめる花の木にとりあへぬまてふきやよるへき
是も落梅の曲の心也抄

雪解

一間　一隙　残一　一名残　一滴
雪の残雪春也　雪の名残　雪は冬なれとも春
なるへきよし師伝ハ侍れともあまた近来人まよひ
くるまれハ春なるへきといへり不審すこし難決さりぬ
るゝ雪ハ冬なれとも雪はなかりハ春なるへきさ歟
無言抄　雪は名残雪は滴冬のよし云人あまたも
まれし　雪の名残と云も残雪の類也滴と云も雪
きれ水と同し春也冬も雪は冬にハあり二ツとを
大法去なりて消ぬもの定りぬれハ滴も皆春也
そのなハ雪のひまも雪は消る事も冬に
あまた皆春に定まると一ハ疑とおもふへし
一消　雪きえぬ

さしても春也消はまへ式時に　富士一消　沫一消・春也
きえぬといふ故なり
一消水ゆきさけのふるや　一消滴　一消烟　大宰大貳高遠卿家
集に紀日さし雪　一毛消無余きえなくにたり　一絶
まきれけりなかりけり
一流　各春　や

霞

三月まてる霞に霧をむすひても春也如此の類二
色のふかさたかれたよひまて其季にたつる事物
ことにおかし　かすみハ秋にハたゝす霧秋のものなれとも
春にも立也和漢ともにいふもつひなりし侍るよし
かなたの方つきよりて春にたつる他准之　無言抄
此文章の内かすみハ秋にハたゝすといへる所詰なる信用

たぐ〳〵秋よりしたりし万葉第一ヨ
秋の田のかりほのあぜのとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ
といつり夏もいつも用ちつる物なれとも一ニ後成
いつり七夕よりも霞ハ雲御抄よりとりと八雲御抄よりとり
其哥万葉ハ春ハ只霞と雲をむすひくハ霞
のうるはしき雲よりて春也こゝろ
かすむるとゝ云詞　非霞字ニ但詞のはしをやうふてこ嫌
縫物ニ狩霞の心ニ可用者春の季
をとりつる也　新式　かすむるとゝ云詞春よりなりすゝ
いつれも宵柏のうよいく物ひすむんるとゝ云れ白か
きはかやうれ詞ハ女ひらハきれ季よりる也他准之
流布　いく〳〵物ひかすむんとあるハ幾重とふてなり
一ニ〳〵春ニ用らきし是新式れ文言よりく相か
なひらかやうるゝ文をかきうすめ物をいひすむる

とゝ掠れ字なれハ拙ひさるもこゝハす春ものゝ
と知一ニ亜言抄よりて文なと書かすむるも春ことあき
ゝ家ハ新式の上ニよたふ狩但當時用る所亜言
抄のこゝとくいとんく新式抄物ニ春の季れ時ハ鶯
ニ折越嫌也春の季なるとも霞の字よハ二句可
嫌也云云又同抄ニ何ニあひらハすてもかもむる
ハ春也とあり當流かくれとゝハとも式義あるめ
なる注こゝとなり時れ宗匠ニよりすゝ一
一ニ千るをむとひ　一ニ網　非氷邊ニ新式かすゝの
ても春なり　あゝニ似ること云事也
一ニ海　非ニ水辺ニ同　一ニ笹
俳物ニ
衣類
新式　一ニ袖　一ニ衣　衣ノ字ニ可隔ニ七
句但不可ニ爲
涙　のかすむなるも春也
そひきそれ也流布　一ニ眉

一水尾　それ水尾とは海よりたゝ雲霧たゝかゝるを水尾とて　一帯

まつ本に小侍従

春られ禁められ霞こそ常ならぬ人ゆき交ふ中山

長閑　三月ゝ　麗　是もものゝ事ゝ長閑ゝ和日ゝ

のゝてすゝすゝすゝいてり流布

水暖　清水暖　むすぶ清水のゆるむなとも春なり玄辛

貧之神ひらてひとひ清水の山春めるしと云事也

空ゆるし風暖なゝも春也　恵慶法師家集

あゝらする謝の海士人誘ら浦風ゆるゝかすゝたなひく

新千載ゝなゝて入ゝら支木南枝暖侍寓ゝふゝ

拾大宰大貳　高遠郷ゝ

風ゆるゝ梅のゝ花咲ぬ春ハつゝハ宿れゝひとれゝ

新撰六帖ゝ日ゝけゝ春也　新式日れゝ

三月ゝ春也

温

ハ可為春玄　只ゝ流布　新式日れゝ

只ゝ春ハ春ゝと云説ハ

春ゝゝ春ゝ　新式ゝ日れゝ

春と定ゝ物也　ゝハ日ゝ暖氣ゝ

ゝれゝ物也　空風水野山

ゝの温ハ雑ゝ事　顕然也　但當流用所ハ

袖口ゝ袖口ゝ

ゝゝ分の心ゝ　ゝて春ゝ

是新式講　ゝ時　兼教趣也

ゝゝ袖口ゝ

云句ゝ當時ハ春ゝ用ゝ

冬迴　さりとて初春ハうるべき二月邊も猶云詞を
一〇長閑ハ成て又さびくなるをさしかるとハ
さし初春ハ冬よりハ春〳〵をさしかるとハ　藻塩草
佐保姫　詞花　さをしかの角ハ春の柳と吹みだるを代元日の数日
引哥也　さほひめ三月よわるを代元日の数日
も用る春ハ色を染神　云云　大略のひめハ春〳〵
もしたりさほひめ〳〵ハ春〳〵ハ　流布
春宮　春ハ宮もりをとハ式目ハ春ハなる〳〵ハ　東宮も事
春ハ宮もりをとハ　儲君の事
霞洞　春也院の御所の御事也　流布
境　ともよりも白〳〵　仙
三冬と盡春　ハくるもあるとも
ても春也　流布

春加氣氏　春ハかるし曉ケて夕ケて是ハ
儀抄　夏ハ秋ケ〳〵冬ケ〳〵同ハ五百
番哥合巻第十一平ハ判の中ハ云梅ハ
宮ハ春ケて秋ケて　奥
ハ秋ケ〳〵ハ　云詞ハ兼ての心ハ
秋の〳〵ハ　云云
春麻氣氏　春ハをて　云詞也　藻塩草　夏儲而同前其外
春夏秋冬ハ字付ハ不及記　記
春尤礼　八雲抄ハ夏ハ　山上憶良　新勅撰
玄心ハ　注ハ春ハ夏ハ
万葉五　春ハ〳〵ハ宿の梅の花ハ　云云　春去ハ万葉ハ玄字ハ
といハ心ハ　云云
心也　祇注　春ハ夏ハ　秋ハ冬ハ夕ハ朝
ハ此内夏ハ云事ハ　哥書ハ

但八雲ハ夏さきとのせうきこれハよるなく愚管見
ひらくべ重てこれぬべ一朝さきも哥よあるべかるす
こ或書ハいとも是萬葉第三長哥第十五ハ長哥ニ花
ハ冬木ようさくるのたれハ勿論 初春也されも 深山ち
とよハ二月まてもあるやうするもれし 大發句帳
ハ宗祇ハ数句ハ春なるハ冬の梅さく深山かゆ
深山ハ寒故ハ冬木れ樣しるべく咲なり梅ハ雪ハ
ひすし

梅

一壺 凝華 舍と云 淳殿ハ名なり梅ハ名ハ禁秘抄ニ云ク
ても春こ
梅壺梅ハ西ハ白梅東ハ紅之由有ニ清少納言ノ記ニ云ク
在ル飛香舍北ニ 順和名 一説梅ハ雑也とハ非也
春也藤ハ花ハ所ハ委可ニ記之
一暦 或書梅樹ノ木ノ前ニ花發故号ニ木花ト云ハ
梅を諸木ハ先ハこうて梅暦とハなる也一

奥儀抄 或ハ梅ハさくハ春れ来をもるる也 梅ハ是
山家暦と有大發句帳ニ春もくてひくハ梅の暦ハ
此花 といつ木ハ花と云説を異説也為家れ明凝抄
もハ説をいく 宗祇古今抄

柳

ハ雪ハひすひくも春也
未の春まてもするのこと
うこふある柳れ枝のい沖れもち
ハ似ようく八雲 稲莚ハ前ハ委可ニ記
楊花 も亦同訓 柳ハ
眉ハ人の月ハ似ち

青柳 一ノ稲莚 是ハ水ハ
柳繁

松花

十週花 初春ハ之物也 流布 松ハ千年ハ
十度花開と也 百年ハ十遍ち

松緑立

松緑ハ雑也緑立
若緑ハ春也 新式

松初緑 松若葉 御歌

十一日、御連哥ニ生ヲふや世くれる紫のなつかしい松　昌陸

若松　松緑含　各春也　松緑添も春こゝにて或書云

新式抄物ニ云こと

ゑをふとしても春とあれと道理あるゝんみとりそふこ

云ハ只緑の色ハ成をいふ也立といふハ行くゝ

ゝ成ものを生する事也各別の事也不可信用云

云如所ニ云ふ一家説但昌程ハ春也こゝにて

木月　めくみ初ふなりこゝろあらの和歌

よりめくみをハたゝふなり

崩木陰　三智抄ニ春ハ部ニ入源氏若菜上ニ色くの

ひとをゝ紀ゝ紀の木ぶもゝ

云云　同抄ニ云ゝ

漬物云崩木いまゝ淺緑なる木陰ゝ藻塩草云云

木のくゝげハあをくゝ説ゝ志きゝ為頼家集

夏ハ

はしの

是ハ新樹の事也おの下間ハ夏なれハ春の詞

なくてもえさとゝ春のすゑ哥ハ代集未見

後撰春上

ゝえ

かやうなる事なれハ

初草　新草　ゝゝ

小ゐ

萩若葉　宗碩藻塩草ニ云

是ハ取分正月也

下萠　植物ニ云越畑　新式或説二月ニ云但月令

草木萠動　雨水節ノ赤也霜雪ノ下ニ

萱　俗用ニ茎立ニ字ニ蘆萱菁苗也順倭名拾遺ニ物ノ

名ニ万葉ニ丈木等ニ物名ニ

薺　蒿　摘　萬葉第十ノ

去日春ノ野ニ摘ツル白ト云ヘリ

薺　蒿　七巻食經ニ云薺苨一名ハ莪蒿莪音鵝和名於ハ木

崔禹錫食經ニ云狀似ニ艾草ニ而香シ作テ羹ニ食之

墨人やおもふ紀ノ貫之三笠山春日ノ野ノ若草ノ

新撰六帖ニ衣笠内大臣哥也同集ニ信實哥云

今日ハまこと雪ノ降ル紀つきせて野ニ出ル若草ノ数ぞ

此外新撰六帖支木ノ哥ノ

鶯　未ダ春ニ

も用ル

枯野霜　なつかしく春ノ名ノ

すひとくハ春也　流布

百千鳥　さくちれるこのひくくも春也ノ千声百声ノ

も云ヘリ　五言抄　於ニ御堂ニ正月十一日御嘉例ノ

御連歌ノ第三ニ紀ノ百ノ千ノ鳥ノ立て　昌純

或抄ノ

ちれるとさくらひくハ春ノ名なるへかりけと云ヘリ

但春なるへし

古今春上　さくらちるハ或ハ

頭昭云さくちるハ春ノ名ノ百ノ名ノ

ちるとかけ

さくちれるとハ云ヘリ　雪の名とかけ文ノ

あまとそれハいりとおりの白萬葉集哥云

弦門ノ江ノ

別して雪ノ名をさすよ

さくの名ノ

ニハ相遠欲ノ名抄云

さつるこ

春ノ名ノ

ちるハ名ノ

蔦ノ鳥ノ

くれ名と云ヘリ

童蒙抄云

ちる名ハ

さてなくさ又鶯を百舌鳥といふを一の名なりともいふも
此書にいふ鶯ともいひ百舌鳥ともいひくれるもいひくこと
らぬならねど鶯といひうぐいすなどいふを鶯といふはいとまれなる趣
にて古歌をいふにさこゆまに以上袖中　畧記之八雲
御抄に鶯の部に入注に云是は鶯にかさねて是春
百千鳥之轉也但鶯に詠有例云云或説にいふも
鶯なれどもとすべきこにはあらず百千鳥を鶯とすべきこにはあらず但
こいふも鶯にこと侍抄に百千鳥をきらふこと云云或説云百千鳥を黄鸝（ウグヒス）の異名と
ありをきらふこと云云或説云百千鳥を黄鸝の異名と
てありとかゆるこふ説ひの事也不可用但拾玉集なども
慈鎮の哥に鶯の題にて百千鳥とよめりこれくう
やうにあるこひのこと事は正説傳受なくしはあるべしや

柳の衣かやうに衣の事にこれ用ゐくれ其をもて事をもて其
名に或は梅或は卯の花萩なくくあるは其はまくあり
よりて大こと是にはさこのそきなるべし四季とも
ふ同他准之まこふ事にはいはれ好士に訊（トフ）
又桃花葉葉に其色くまて委可見之

温故目録卷第二

衣更着

釋奠上丁日　是ハ年小二月と八月とふあり上丁の日必をこなはるゝ一日蝕國忌祈年の祭
なとあるゆへ中丁日あり大学寮にてをこなはれ孔子なりしより十哲の影をまつるとて少弁納
言なとまゐりて廟拜より宴穏の座よりて文章博士題をいたす孝經禮記毛詩尚書論語周易
左傳うらはめくりてもちゐるあくる日ちやくてんの儀まゐりて群人たちて朝餉のまへよりすむくゝ又一人清
手水の間のかくれすのこにてあまいたふ松のもとのそと
ゆ群人うゝこてゆんやのはをれなまる時日の天てん

の彫りことりをなくいひくなくさけ　もつて麓の
中よりもこのこんてんハ文武天皇大寶元年よりはじまる
礼記ノ王制より菜を釋幣を奠て先師を礼す
ところこのたみ天てんとハいふや　後漢明帝ハ孔子の宅より
幸して仲尼をまつりより七十二弟子を祠ところこゝ又
先聖とし孔子をいひ先師とハ顔回をいふ一ハ
周公ハ先聖といひ孔子を先師とハやはりを唐太宗
貞觀二年ニ改て先聖先師とハ孔子顔回をやはり
やはり神護景雲二年　孔宣父を改て文宣王
由弘仁格より文てんこゝ今大学寮よりおさめる孔子十
哲の影ハ異國より渡て我朝繫代の物として行る
ゑ　公事根源　猶延喜式江次第に委訓よりを
ときまつりとしこゝや両度あるもたゞめを為正事
春日祭ハ所ノ可記之年中行事哥合

献彫　必釋奠ノ次の日あるまた庚日ハ當まつり同春秋
二季ハ行なるゝ釋奠延きハ献彫も同中ノ庚
よりもこゝ彫を献すまたハ昨日ハ釋奠ノ供具ハ
大学寮より内裏へ奉る　年中行事哥合秋哥
まつりせしハ身のけがれをふれひろきて
けがれハ神食ことかをるやなを　神供なるやも

春日祭　上申日　二月ニ十一月ハ行る先未ノ日使ノ
府官人摺袴着て雜人ハ萬賀茂ハ祭のとき
よ参つて事ハ由を奏ものこと　雜人ハ亟名門の人
人いて法ハ式一ハ弟をゞ茲
しふ茲人出車奉るとて弁もはかりくしふ清和天
皇貞觀元年十一月九日此祭ハ春日四所

大明神とやなるハ才一の御殿ハ武甕槌命才二御殿
も神主命才三御殿ハ天津児屋根命才四御殿も
姫太神是也神護景雲元年六月廿一日ハ武いかつ
ち命常陸國鹿嶋より清すみ所へうつるよ事おほ
浄無物ハ鹿にて榊のまの枝ばかり清むしちよとさ皆
ゆ伊勢國なりつれ郡ハ清ゑたりはは
中臣の連時風秀行といふ人ハ十二月七日ハ大和國あ
山よりせおろ同一年二年正月九日三笠山ハ跡をれ
おく天児屋根命ハいとひとれ足こと姫太神のりて
つをのくばかりさせおきれハ神主命ハ下ばふさのゆ
香取ばかりつをせおふ天児屋根命ハ河内國平岡よ
つをつりおふ姫太神ハ伊勢國ばかりつをせたまふを
なぞ天照太神ハ分身とてまたまふ一同一
さ年の十一月九日託宣の事よりて御門より勅
使をつかはして三笠山の下つ岩根ハ宮ばかり太神を
くかれ四柱の明神をあがめなるおくりこさ事ハ縁記
なるにたしおくるや　公事根源
鹿嶋ばかり庶ハのりて春日ばかる三笠の山ばかり実ものの文
是則三笠山ハ四神始て跡ばかりをとゆる事ばかり
かさばハ庶の一名也　辨引抄　両度の祭ハ以始為正　新式
ばかり本こすゆ一ゆ度ばかりめれ季をもつ也後の祭ハ
ゆ作ハ依て季ばかり定めおく一祭なりてもかやうゆ
ゆ度おろ事ハばかり祭ばかり正意こすゆ
堀川次郎百首春日祭哥云　後頼
二月のつかさなれや春日山峯とふしよりてこまるる
後拾遺春日ば祭をよりおばかる藤原範永朝臣
ゆふかつる三笠ば山の神ゆませもあ見ばかるこハ春をさかりて
是ハ三笠の山の神をまつるなりしてもまるまばかりばかりを

童蒙よりそなへられ引哥ゆゑ記之

率河祭　上酉日　此祭ハ春日祭のごとくなる神祇
令よりの三枝祭と同　かくハ四月にてなる
藤氏南家の口傳ハ率川社ハ右大臣是公の建立
にいてくるさまハ又三枝祭の所よりの事　公事根源
十一月と云ふ

園韓神祭　上巳日　延暦遷都の時造宮他所にうつ
されたるを御門をまもりて
まもるゆゑ託宣を未延喜式ハ園神一座韓神一
座なりの祭礼ハ年ゆゑ二月と十一月とにて
上の門にまつる儀式なりの委事ハ西宮北山江次第
やうに書よれるなり　公事根源　若有三巳之時用中
巳日但春日祭後巳　云云　見延喜御記

云云　拾芥抄

大原野祭　上卯日　是も十一月と年ゆゑ二月と社も
后宮のまつりなれ春日本社ハ
よりて都にうつれ西ハ大原野行啓を
まつりの始ハ仁壽元年二月にはじめをこな
る近衛の使ハ春日祭ゆゑなく上の弁内侍
なるゆゑ　公事根源　當日使立　拾芥抄

初午　初の午の日稲荷ハまつる事ハ顕仲朝臣初午
をよめる哥　堀河後百首ハ
稲荷のしるしの杖をさしてあまのくにの邪
新撰六帖ニ光俊朝臣
二月やよゆゆ初午の杖にていなりの杖ハとりもたり

蠶　六百番哥合判ハかひやくの義ハ法さて云蠶
養れ室をハ蠶室とかける是すなわち後頼朝臣

此書て作る物はもむらきれ事をいてるあり春初子日
むらさきをもちて蠶室をかさりうし祝ひそしらこと
いるおりをて蠶養れ法ハ正月初子の日午の家せせ
るかるをうし姫と稱して蠶室をかれうし祝ひを
ひるゑ次ハ二月午の日もしめて蠶れ亂をかして
暖日ハあらしめて三月午の日もしめて来ハ四五
月ハもひく時三寸云云ろ春のろひれをふの むうさ
れ事ハ垂名抄神中抄八雲御抄抄ハ委ものハ夏こ

祈年祭 四月 是ハ大神宮以下三千一百卅二座の神
をまつりせらるもるを
くるをの〳〵幣を作をる諸國よも年こひのま
ひりを作ふ周礼ハ祈年ハ豊年をもとめること
ひてこうう神祇官ハてをこなる年かひてうう諸國
のり物をもちりふ白猪白鶏やうの物や

天武天皇四年二月ハはじめて此祭をたゝ祈年
の祭月次両度新嘗祭をハ四ケ祭こて國の大事
こすゝゑ 公事根源 拾遺愚草 負外上
あるゑれ年祝ハのゝひ〳〵ゑれ祝ひ〳〵式 二月のをう
年中行事奇合ハ
いくそふうれをなる祝ゑ代を三ゑ祝ひうれ神やうん

佛別 去佛 二月別

朧月夜 三月ハつるおりをこ云詞春ハあんなるし
ゑひくハ春こうゝ 流布 霞ハ朧 二ウ嫌 新式
鐘朧 朧夜なるも去や 但二つゝもハ
嫌詞こ毎言抄ハ
靖火燎 陽炎 陽れ氣の煙のやうふゑゆる
ふかきろふのゝもゆる春日こよる是や

遊絲　春ありて夏ハ初ーとなれるそのもの也　八雲御抄
林希逸　莊子ノ口義ニ云ク野馬ハ遊絲也水氣也
杜子美ガ所謂落花遊絲白日靜ト云云　又莊子ニ云ク
其急似野馬之走ト云リ　言心ハ春ノ空ニ糸ノヤウ
なるものゆらめかやさはりなき事野ニ斯馬ハ越ヤウ
なるものを遊絲と野馬と云也ひるがほハ陽炎ニ名ケタリ
ゆらめく糸のあるふよも似たる也
又春の日のうらゝかなるに
蘖　草木ノ芽ハいまだ蘖要ニ
云斬而復生ル曰蘖ト
蘆角組　草ハ芽のくむ皆春也芦ハかさうん真薦荻萩
落なとはなくくむと云ふ春也
詞花集　まことに芽はのくむ沢ハ法ノ名ハ物もたなれさるなり
春ハのふふきくるしあるはれひ萩の枝ハ未ハ

なるのくるひ　千五百番哥合ニ小侍従哥
若草　草ノ若緑　草ノ若葉　木ノ若葉ハ夏也蒿ハ
若菜　菊ハ若葉ハ秋ノ若葉
若菜なと秋夏ノ季をもつる草
もつ紫くすれいろれ春也　流布
後拾遺　野くれもやよひ月のくるまてまるとうつ紀さるくつはな
さわらつよさ草の名也今案ニ若草と可云歟
綺語抄云さわらつよとハつゝはしける草ハ名也　袖中抄下略
芳草　新式若草ハ
春也　流布
若菜　春也くるひくさとくるくるハ
雜也　花をしるくひくハ秋
蕨　薇　毛
詩

焼野

莖黒薄 後拾遺 おもかけにすくろかれすくろかれつのくめいろこちなるを酒といふ

すくろのすゝきは春ろやきすくすれすゝのくろ

ろ紀ゝ野を略してもくろと云ふ或人云すくろハ

もゝ実れるを紀くさ紀ハすゝと云そのふるさくさくさくやを

てくろきをすくろと云ふ 袖中抄 採要 焼野薄

それよりつのくゝし 後撰 きゝよりハ萩のやきをうかれふてゐ草つゝよと誰をさそはん

萩焼原 萩原をやきそれよりはしまる草を云萩の下萌も

畑焼 山を焼原を焼草をやく

畑打 耕畑 まくの紀いつまもまきの

耕田 ハ正月未ゝり 田打 畑打ニ可准之歌春

三月まゝ也 田の哥小あり

苗代 植物ニ可嫌打越

之非水邊新式

水口祭 田神よりはさゝ

ゝまつる事也

種蒔 植物よ打越嫌新式

ハ神ゝまの事なり

種下 堺川百首

後れ男の苗代はをあせを深く今と毒ゐ小種蒔

同 秋ゝ山ゝ田ゝ孫を思ひおて苗と乱ゐ種ゝ蒔

假人之ハ田ゝ田ゝ作ゝ乃種蒔

なゝと云ゝも春なり

麻蒔

土筆　支木ニ為家
さはひめの筆かとそ見る流れ書る紀とる春はきしたる

烏芋　春也堀河百首よ
さなつとはそのふまさつはさもとの小田よくるかな

水葱摘　春也水葱ノ花ハ夏也　流布　假令花ハ字
秋ニ云説ハ非也　昌程説

椿花　只椿ハ雑也花ハ春也但白椿並言葉ニ嫌詞ニ
なくてもよし敷白椿おらしてハ春也

紅梅　嫌詞　八重梅　支木よの字なく　遅梅
也
咲そよ色の重梅　初梅　宗砌　東坡
詩ニ二月驚梅晩幽香此地ニ無ニ
待花　花蕚　合花かめ　八雲　梅の古めき　花催
こいて但梅よかさるうす　藻塩

花火燈　花灯　初花　花紙解　すこく是年の
しるしの事也　春八二月ハ三月

初櫻　初花櫻　糸櫻　獨揺櫻　同上ニ支木ニ後
類哥ニ
あちとこんさくり揺れ枝おりく抑乃糸ろ　すりハきをり
樺櫻　古今物名よかうは揺とある是也　和名集よハ朱櫻
とまくすれ花なく　細流　各々くの揺
しらしやこんよて
二月の部よ記ス

歸鴈　乃れ名所　厂　鄙　北、行厂
鴈よかさるとんはしむとひくも春

鶯　一渡　一巣　春也吉日をとりて
巣をくふ物こをり

鳥巣　諸鳥の巣大なる春也　鳥古巣　子規巣　弐と三月の部

水鳥は巣ハ夏なり　萬葉ニ詠れ来ること

鷗　鸕鷀　外

よのすゑ本あきこと

今こゝに巣は次てに記

よりて略いまれ也　まれ〳〵詠るの巣より時鳥の日和

ゆゑ事なりといへり　又ハ郭公也毋ハ詠る　又ハ

似て毋よし

似たることなり

鷹巣　新式抄物なくに春とあり

雑とハ一説あり非也尋其

義春也大發句帳春部に周桂句

けり　鷹は巣山や雲井庭の松諸鳥の巣ハ春と

あきと是等あきくたるなどとよくと郭公ハ巣と

ても夏又詠るの巣ハ雑とハ説あるゆゑかれ〳〵記也

鳥囀　諸鳥は囀皆春也三月よりなる水ぬるもこゝ

いつり　若年は時神　四天神　連歌は帝ハ

ぬるなりて多はさこゝなる　云句ハ池を付ぬ時ハ

其座は人問て水多はさこゝ事あるゆゑ　云源氏

橘姫ハ池の多ぬるゆゑ　ゆゑ

つるなりなどあるこゝ　紅葉ハ閑口果

顔鳥　春也かゝよ多なれ　流布　かほ鳥ハ春日也

音羽山ハ　ゆゑ　序感　ものとこゝ

多　恋　容鳥　数鳴　萬葉第十ハ

源氏物語　是其鳥と定欲　但定家不知之

とハ推之　ほとゝぎす　決之　八雲抄

第三下　河海抄花鳥餘情藻塩草　なにハ

は説　云抄　云抄　定家

郷不弁　但其花鳥　なくこゝ　花多也

ものこゝ　是非也

いつはるくも又すこしも学文の損益にかゝはらず強て
いふ時ハ古人の説々を刺謗しらかハおそるべからず
先集 夕されハの歌あまたあるかはまれなりとて見られたるに

雲雀 三月にわたる
と一説なり

雉子
きゝすと云ても猶春也 但狩場の雉ハ可為冬なり
新式 狩場の雉同鳥に声音鳴なくすれハ春也 巳訖
只かりなれ名ハ勿論冬也 流布 雉 三月にわたる
拾遺 大伴家持 春の野にあさるきゝすの妻恋におのかありかを人にしれつゝ 袖中抄
きゝ考日本紀にきゝしと云 きゝしハ詞を略
するときゝすハきゝしの異名と云つるハひか事也
取要 きゝしと多くいゝすといふうしとも同五音なり
藻塩草 あさりハ食物もとむるを云也
きの字とすることもある歟と云詞

閑居鳥

鳴鳥狩 **朝鷹** 春ハ雪月に雉のなく所を
きゝときさ未明に行て
狩ことせしハ合せ鳴鳥狩とも かり場の歌あるらしと云
聞すなるもし朝鷹鳥狩共ハ云也 **朝狩** も春也 藻塩草

鈴籠指 鳴鳥を東国にする歌鷹にすれたとしてあるなく
歌鷹にかゝはらぬかなれハ雉のなく所に雉に
ちらせし事也 桛を細めしてさしれと **宿狩** 泊山三智
歌のことと云へさ定家三百首の注に見えたり 拵にハ
こより狩にも鷹のえにあるかをちらしけしとふる
とかくと云 云然ハこれまで
かりこし只歌鷹の名あるらし

白尾鷹 継尾とも白尾とも同事也 其鷹歌に河尾をこ
さ歌に名きこしれと云白きを持りて継たる羽
さ西園寺鷹百首注云白尾はく事一條院の御宇

行幸の御狩の一首古山を打ものしかく氣色ひろ
きれハ源政頼上ハ尾二きりて白きを尾も絶ぬ其
心を詠るものゝ為ハ上の句を略ハ言葉とゝく
まゝく深心ハ詠る心あるゝ事也御門
渡不審の時政頼哥
白尾　白尾
二尾ハ尾とハ雪ハ白きを絶ぬ心を詠ゝ
とゝ仕りきるとハ心より白尾と云絶也 同百首ハ哥
能あきハ尾ハ白きを尾ハ白きを絶ぬ心を詠ゝ
ハ哥ハ付て或新式抄物ハ春ハ白きを尾ハ
少しなる為ハ二三ハ白きを尾ハ白きを絶ぬ
猶鷹飼ハ口傳ハ哥ハ心也と藻塩草もいへり

优保姫鷹

松ゝえや梅ふたきをつくさぬ人
さ春ひめ鷹とハ春の鷹ハ惣名也 定家 三百首
春の部ハ注ハ見ゝ

蝶

ちりぬれハ小ゝ雪ハ春ハ去ぬ蝶ハ去ぬ
二三日ハ春ハ小ゝ雪ハ春ハ去ぬ 同注
或ハ春ひめ鷹とハ春の小鷹
春ゝ蝶ハ春の蝶ハ春ハ去ぬ
八雲御抄 梅ちりてあるゝ詩ハ生不得近梅花
とゝ詠ハ但只梅の時分 藻塩草
たゝ書ゝ為ハ白ゝ
壬二集中ニ家隆卿哥也 拾遺愚草上ニ定家卿哥云
菊ハ蝶ハ蝶ハ花ハ
初ゝ蝶ハ蝶ハ花ハ
題ハ蝶ハ外ハ蝶ハ 但後撰哥ハ蝶ハ

櫻衣

表白裏赤花 雅花御説 桃花葉葉衣色異説云
表白裏紫ゝ三月と云云

温故日録 巻第三

彌生

奉御燈北斗 三日 是ハ天子ノ北斗ヨリ灯明ヲ奉リ給フ

峯小火ヲ点シテ北辰ヲ供セラレ給フ所ニテ高サ一丈ニハ北ノ霊岩寺ナリ

御記ナリ一日ヨリ神事ノ事ヲ

今ハ清竹北義ハ内ノ清掃ヲ行ハ御殿

ヨリ北ヒトヘヨリ御座ヲ敷テ三度清拜アリ延暦十

王年ヨリ始メテ北辰ヲ祭ル 公事根源 中畧

曲水宴 同日 流觴 巡水宴會 曲水宴ノ事

三月三日也 是ハむかし王ヲ始メ參テ清前

テ詩ヲ作テ講セラレ清水ヨ盃ヲ

てゝ文人以下是をのしよし康保の御記よのせらるき
年ゟ雄略天皇元年三月上巳日清苑よ幸して
めぐらされしとあらはさきたりすと日本紀よ見え曲水宴
八周の世よりはじまれるや文人を水の岸よならべ
ながれの上より盃流なりて我まへにきたらざるさきに
詩を作りての盃をとりてのみけるなり羽觴を
なかにふ事も此事なるべし又上巳のかくとそ唐
人これ東流の水上にそゝぎみそぎするよし漢書ならびに
見えたり　公事根源　萬葉第十九ニ曲水宴をよめる
中納言家持哥云
新古今から人も舟をうかべてあそぶてふ今日ぞ我がせこ花かつらせよ
舍濤魚乃競伽河よ三月三日其水をあさ河のはら
ましてて逍遥すれは諸罪
消滅すと云ゝ見内典袖中抄よ委

巴字ノ水

丈木ニ権僧正公朝哥よ
かさなれるの字也うつゝをなかれ川のさかつき
ならひおきて神をのそめぐりよかざしもの字のさかつきの
みぎりもこめし字よはやせしすなはちたをや水をそなへ
是これ三月三日乃哥也丈木よのせらる然ハ巴の字也水
ハ折ノやりうせぐく春なるへし一ク三躰詩ニ巴江學ニ字ヲ流ニ六
恐ク然ハ三月よ不限欤こ藻塩草よみえたり但朗詠
よも書ニ巴ノ字ヲ知ニ地勢ニ思ニ魏ノ文ヲこいふは曲水のうち
も巴の字よ似るも所謂巴字乃本躰を◎如此ある
なり曲水の地勢是よ似るなり又朗詠よ水成ニ
巴ノ字ヲ初ノ三日ニ源ト起ニ周ノ年ニ後ニ舉ニ霜なしといふ三
月三日の事也　初三日とは三月初三日なり周
年とさためらる年月を云也そも周ノ代よそく

蝸緻巻三

云也周代ハ周公旦ニ云一人洛邑ヲトシテ曲水ノ宴ヲ始メ玉フ也後幾霜ヲヘテ其後幾代ニシテ紆ヲ云也年號ハ星霜ニ云也

已月祓 上巳 河海抄云漢代三月上巳ノ日百官東流水上ニ禊飲自魏以後用三月三日不用上巳鄭國俗桃花水上巳ニ以上巳祓除不祥猶委

須磨御祓 上巳日 是ハ光源氏須磨ヘ流浦ヘ左遷ノ時三月一日ヨリ云云巳ノ日陰陽師ヲシテ云云ヒトカタノ舟ヲトヽノヘ人ヲトノセテ流ス事ナリ彼物ヲ云ヘリ

踏青 唐ニハ上巳ノ日曲江ノ辺ニテ都ノ人ヲ云云酒ヲ云云ノ草ヲフミ遊戯スル事ナリ歳時記圓機活法ヲ云云事文類聚ニハ三月三日ニ踏青鞋履ヲ云云ヒトアリ又圓機活法ノ一説ニハ蜀人正月八日士女遊戯謂之踏青ト云云

桃 ヲ宗トスル云或ハ三月三日

南祭 中午ノ日 石清水臨時祭也マツ二月比ヨリ奉行ノ蕤人使舞人ヲヤトヒ云云中ノ辰ノ日試樂ノ事ヲ云云試樂ハ内ハヲコナハレ内ハヲコナハレヤ代ノ云云ハ必アル云云試樂ニモ調樂ニモ云云ヒトツ音樂ヲ云云ノ云云ヒトツ當日ハ御禊アリ庭座ニ使舞人ヲ云云大臣以下カサヲ被ル使舞人ノ冠ニハ云云三献ニハ五献ヲ云云カサ孫ヲ云云ノ事ヲ天暦五年四月廿七日ヨリ始テ臨時ノ祭ハアリ云云ヒトツ年將門ノ乱逆ノ事ヲ一時祈リ云云ヒトツ八幡大菩薩ヲ云云カノ門

の首をきり捨てしをもて其報賽のため小臨時
の祭をもよほす其時の使ハ播磨守允明の朝臣
舞人うゑ人をのく十人を
初うやうの式の石清水の行幸にはくはつ
是ハ其初りは寄よなん行はるるに天禄二年
三月より毎年此事ハ成行る次の日ハ還立の
儀を南祭ハ御前よりめさに弓場殿にて勸盃ろ
くなくなまふ 公事根源中畧 江次第六に云有二
午時の用一下午一昔ハ南祭ハ還立なくて賀茂し
ろよりー由雲圖抄よりを代をこまりく由江次
第あとにもえくら 婚川次郎百首に石清水臨時
祭哥云 俊頼
ゆかりのかさひらりけなりせはおりて淀のりらせ舟や
南祭とするハ常の事也 男山をふるくひ祭 ーて

なくくしてとも春也 宗因句也正方毎吟ゑ白
いふえひすれ白の行末と云句よりけりら

桑子

三月午の月をもて桑子
行る事前よりもるくしら

新桑摘

萍始生 月令に穀雨節に氣候
也本朝にても春なり

鎮花祭 是大神狭井の二祭をいふと神祇令の註
ゆ云花の乱ふるを疫神分散ーてくを
なやまする加よかまつ成ちづらん高ふ山祭ハ三ヶ所神
祇官にて行る 公事根源 新拾遺第十六に関白前
左大臣哥云
也宗那まさりの花ちりぬ風おさまりて花いのくらし

小弓 弾 是木第廿二に慈鎮哥
秋の稲のおさまるせはてはのまり小弓

遅日　とふ事ハをそく暮る事也物
事ハをそくなるハ新式抜　永日
弥生山　名所ハ流布只
玄の山とふ事也
夏近　夏を隣
待夏
春過而　春ハ暮ぬ　春ハ行やく　春を隣
四季とふおなし其季ハ流布
花　一ノ波一ノ瀧一ノ雲　上三ハ新式ハ可分別物れ所ハ
おせたよりかむつ一ノ詞ハ
いろ〳〵ちがひ何ものもつ一き事ハなし　新式ハ
くちをしき人ハ訓ず一　但新式をよくもちるくまれなり

今爰ハ異説を所ありて委紀明一て記一を記ぶ
きれと事なるきれハ不記之其上季ハ所もての
事を第一とする物なきに去遍の事ハ泊よりに不
及四時他准之但事ハよりて委の子ハ事もあり
一ノ雪　植物可嫌之降物不可嫌之　新式　一ノ雪吹　全上　一衣
一ノ袖一ノ袂　花衣正花也植物ハ折越嫌一一衣類
ハ袂同　ハ袂同前ハ
流布花　衣裳之色花木　不可為植物但依其色可有其季
ハ袂同
新式　是ハ衣裳ハ山吹色花染なるハ季ハ
植物ハあるとふ儀ハ無言抄云ハ一のふ所ハ
ども草木ハ色ハその色をもつゆハ所ハ
遍一一山吹色花をあなとふ新成一一とハ多

人絵ふかく草木れ下よハ櫻を繪よ者ハ春也　紅葉
とかくハ秋なり然も季ハ秋をつゆ〳〵ゆ〳〵拍よ打紙姫
と云説不謂拍子よわ〳〵すと奥山乃〳〵きこゆ首
尾相遠〳〵て難決すてよを代乃宗匠宗養句よ
打越よ〳〵きふをきて山吹色れ衣を付らきれ
いろ〳〵かくさくもくさくらり又新式よ恋摺植物ふ
ゆらすと云り是〳〵てきる色〳〵然ハ新式乃古紙
守へきこゆを代打越姫こゆふを新式乃文意よた
ふ欲但時れ宗匠よたゝ〳〵〳〵際ゆ〳〵て不可
論猶〳〵く當流よまする事〳〵れよかゝ〳〵ば

一皿　正花也その れハ檀ハ　當〳〵乃事也式よハ其
時節〳〵れ花れ多むくるれ流布

一籠　花也檀法むし竹乃花こゆ〳〵ゆ〳〵僧れ檀を入
ゆゝ　れも時〳〵れ草木乃花をゆ〳〵れこ勿論

正花也植物也花
乃ゆゝ同前花つむ義也　一机　源氏榊　鈴虫たゝ〳〵
ゆ花をこすゆる机也
又机乃脚よ花〳〵たゝ〳〵れ
思〳〵て孤〳〵佛具をすゆる机　一瓶　勿論正
花也春
也植
物也　一席　花乃座也又花乃ゆ
きゝも花れ〳〵ゆと云　心一　春也
新式
正花也植物よ打
越嫌也　流布　一心
詞一　勿よ〳〵て去〳〵ゆ
雑乃部よ委可記
一姿　植物也正花也但句形よ〳〵ゆ
ゆ〳〵ゆ流布　姿れ花も春こゆ云言　一顔　同
前
一面　同後撰よ花乃ゆ〳〵ゆハ
ふ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ
一貌　一俤
一眉　一上　一友
一都　正花よ〳〵ゆ〳〵
ふ説ゆ〳〵ゆを代

人のいひおとる説也不可
用之　流布　植物也

―園　さくやの　花よさくやの
とゝの詞ニ
今姫といふ説あり　おもを姫　―然もさくやとゝの詞
正花ゝゝ　―但可依句ニかゝいて　無言　此説のごとく
なれども正花は落着　―て其時の拙句は井越嫌
句　―さくやとゝの詞ハなゝ小乃とよく付ていて正花は
ハ成ず　―きこゝ有りと當流用而無言扱れこゝ　白氏
文集ニ昔為京洛聲花容と作らつくゝまゝ秋也
花やぎとゝの詞源氏柳　又清少納言記たまへるこゝろ
是もさくやこゝのこゝろ　―花榮と書之歟

繪　―繪書草木依其物可有其季
新式衣裳ハ　草木の下ニ委注す　―夕立
名や花に附る又花の書吹なと云ふ　―きゝ西行家集ニ
水とは花の夕立ゝゝ　―吉野よ川の流れまゝれ

―房　こゝろも正花
こゝ拙句　春也

―漫　同
前

―林　只花ある
さくやゝゝ

―山只花を
山ゝゝ

―島　花ゝやゝゝる名こゝ又只花と
ゝゝゝもいふたり

―義ちりて其儀也　西行家集ニ落花を
まれなる袖の上を其物をきすゝ風
―代花のちりかゝる代こゝ花乃ちりくゝあるこゝ
いとり乃こゝ字なくてもいてゝ丈末ニ後徳大寺左大臣
大井河ゝゝこゝ清むこゝ　―ものハ嵐の山ゝこゝ
是いちりかゝこゝ

―青墨成しすゝくも春也青墨

雜　―　可ノ題ハ
雜なれハこゝ墨をむこゝて憂こ

殘花を夏ハおもせども連哥ハ春ハ成こゝおゝこゝて花
月雪ハ春こゝ　―きゝ事のこゝ約束　いもあまりこゝ

くるしきれハ大かたうつして筆をとゞむるくせうらにし其ハまて
ちまくいふさる事のみおほしとも師説をとすれし也
予か聞事也又後生の童蒙のたすけにハ花月宮
の詞の未練なからんもくるしからす自余の事をしるす（未練之

櫻

―人 可為植物 新式 春也 催馬楽のうたひもの
花人なとゝ云ふハやひらなるにや 暉麗なる
人を櫻する詞也 新式抄 物にもしるしたる物なくて櫻の
あるとよめる人もとも櫻人といつらうふあらすなと云ハ
物にしたる物によるへく
―田 可為植物 新式
うれことなるへし
櫻田ともいへるのあるとも聞えし ―大山櫻の事をも詠まれ
是ハ宗碩の宗祇に問ひまいらせしに返答せられし
ところ田の稱をとハ一本ハ生せぬ物なり其ハとく櫻おほく
しつかなる所の事也 田ニ七句嫌 櫻二本の内也 新式抄

万葉十六九 あしひきの山櫻戸をあけおきて我か待君を誰かとゝむる
―戸 山さくら戸とハ櫻の木にてつくれる戸を云なるへし
まきの戸杉の戸松の戸なとのたくひなるへし 袖中抄 新式
に西方ニ可嫌之とも植物居所とハ不嫌也 ―駈
櫻の外からの宿の事也 無言抄
拾遺 櫻かりあめはふりきぬおなしくはぬるとも花のかけにかくれん
さくらかりとハ櫻を尋ねもとむる心也たつねとも求むとも待
と云心ある事あれは又古今にも素性
哥の詞に小山に僧正遍昭とゞめけるにまかりて
そうれとゆるは松前りうめにて待る先生奥儀
抄略記之 抑さくらかりとハさくらかりの雨のふると云
正説あまたあるも唯櫻をかりわく説に清し也 子細雖
多不可定之 二八
雲浜抄 猶袖中抄ニ委
遅― 春 もさくまて咲といひて
も春也 流布 晩櫻ともいふ

梨花

躑躅 木也 新式 羊誤テ食ヘ之ヲ躑躅ノ而死スル故ニ以テ名ヲ之 順倭名

馬酔木花 馬食ヘバ此ノ葉ニ則酔リ故ニ云ヘ馬酔木ト 堀河百首 俊頼

[illegible]

撰六帖ノ光俊

[illegible]

万葉ナル園ノ[illegible]

[illegible]

[illegible]

今法 ノ知家 里人ハ不ズ[illegible]

[illegible]

新撰六帖ノ哥也 堀河次郎百首ニ俊頼哥又 純曰

家集ナルフ[illegible]

[illegible]

桐花 文集ノ三云答桐花ニ詩ニ花紫ノ葉青ク月令ニ清明

節ニ桐始メテ華ヲ云本朝ハ四月比咲ケリ

歎冬 實ノ[illegible]拾遺ノ

[illegible]

草也 新式 惣別

かつらハ草ノ用也

藤壺 飛香舎在リ弘徽殿ノ北ニ順倭名 言抄云藤壺

梨壺とゆふハ雑也といふ萩殿なとは秋なきとハ於つか
ハ雑なる事不審なりされと於きて梃乃書日よのする
とはよ此道ハ定まる法分を可守事なれハ無用也
是非よそ説又、梨法かよ花なとせすして春とし
梅法か桐法かの法ハ見えすと昌程へ其儀よ梅法か
花法かハ春也梨法か桐法かハ雑也こいふ梨つか桐つか
もおつくハ季也云云無言抄よ花つか雑也怪の書よ
のする上ハとかきる文言ハ新式今案よもみえ式目よ
ある事るやおかつなし仍花つかハ當時春よ治定す梅法か同前

菫菜

茅花

八雲よハちがやとあらちハ於法なれ同し事也淺茅
ハ花の事也 藻塩草 万葉第八よ
茅花抜淺茅之原乃都保菫今盛有吾戀苦波

まゆくあくもよあり 新撰六帖ニ知家
むかこれ乃芝草かよおて去の法なれも人まゆくなり

菴蘆子摘

後於き三月也和也りちみハ名しるなしいきけハ澤邊よたてこ摘之
声てゐ三月よなれハよあまさゝあ之此方ちよ母子つむ是
あそしおほくよめる也是ハ後頼家集よあり

若和布

栗蒔

紹巴千句よこころくよ満なしあされさと云句ハ春なり
夏よそハなしやそてをしよ夏此句見えさる或説ふ
云苑圃よあつねまきハ無名よ種まくこ云ハ稲の事也
其外萬此種まくも大てこ春也栗まくハ五月也刈は
八月也こ云也紹巴此句ハさし合なるへし夏也云云今按
云然者可随所好欲但先達此懐紙を
ところふよ似られえ其まし春部よ注之

上梁（ヤナ）　糸（ヤナ）の鮎　糸（ヤナ）上やなの新撰六帖ニ田上河よりの又野
洲　はしやはしのうりやなかなく丈なるにあり哥ハ

若鮎　ゆうのとうり　小鮎
もよりなし

櫻鯛　くしはよりに櫻のころひくたいの事ニ又
櫻貝同前　流布
櫻貝　共ニ名ニ付て可為春歌云云　新式　櫻鯛櫻貝
なとまはの数の内ニさかとのり　新式抄

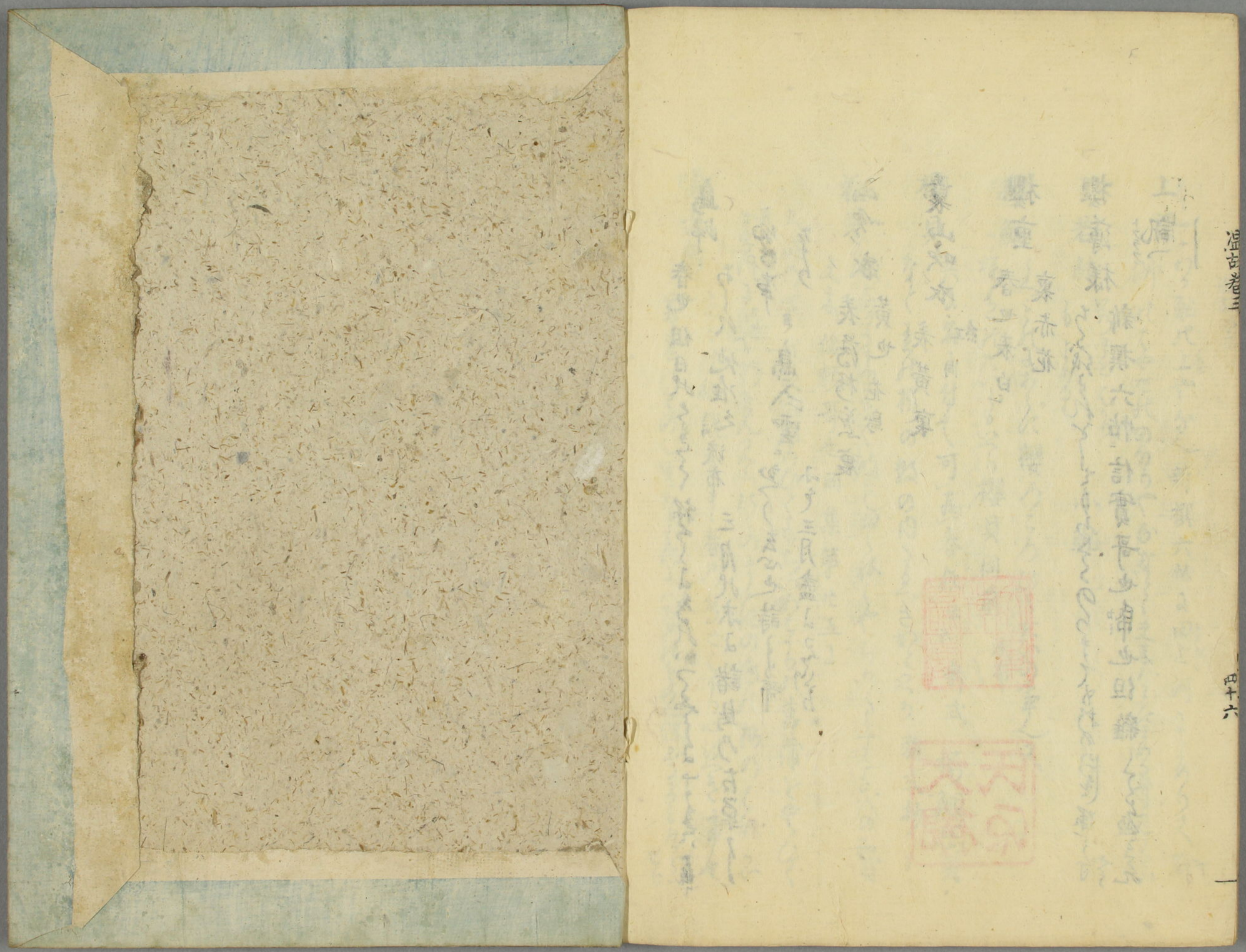
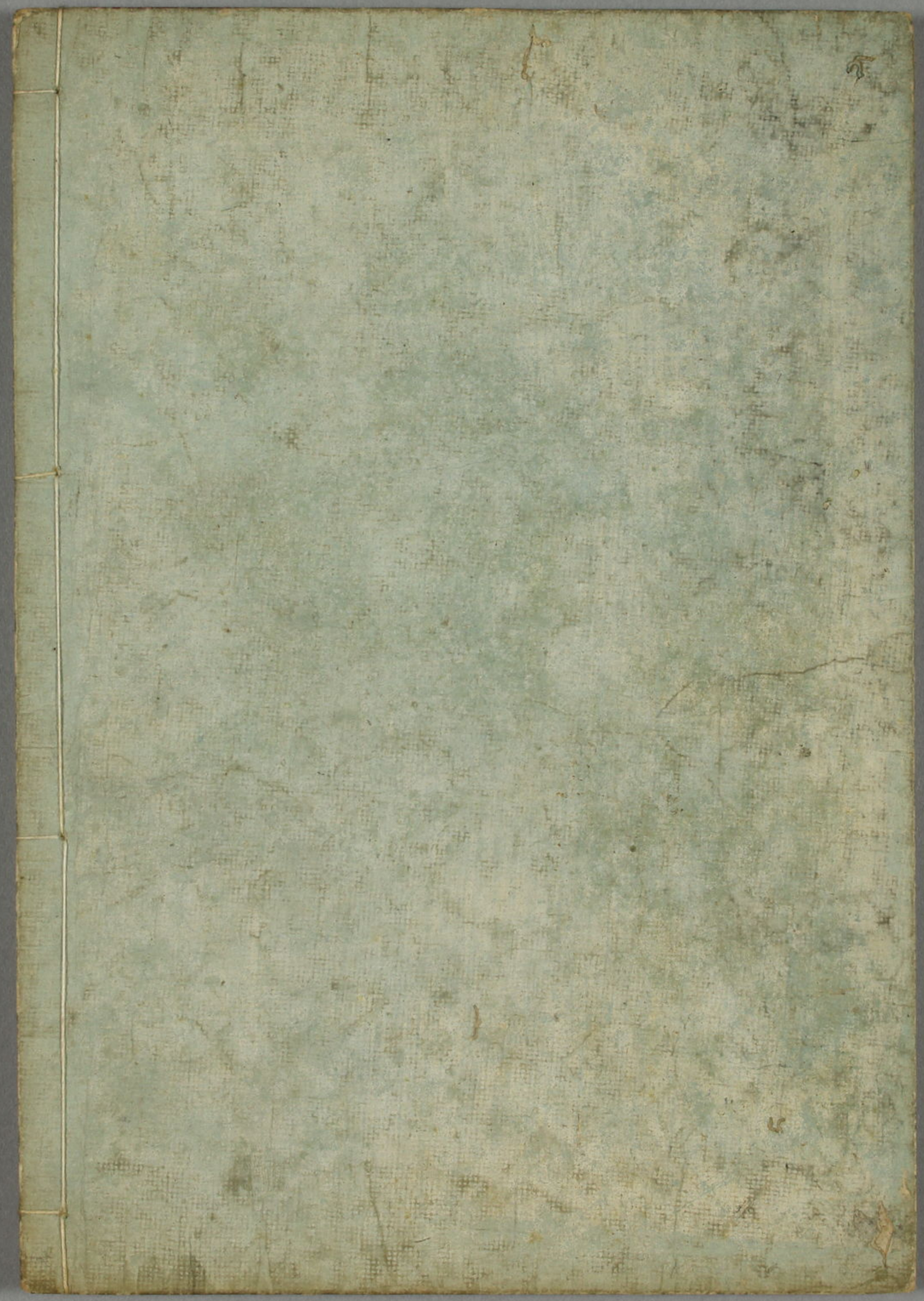
花貝　枝なりにすまく波と枝ニ絲とやちりくるなかの式の歌貝
支ニ　後頼哥也　同集第廿五ニ
大淀の浦方の花ひろひくもちりくるはの菖蒲と枝ひく
哥枕ニ後撰
まきの葉やわきんとちはくのまはの柳の枝ハ
家くの秘説ニ春乃名とちり心也ニ事也
喚子鳥　春ニ鳴ハなくはの深山ニよりとなるハ

鳥帰　春也　但日ハくまくく祭ニくるとすきハ
ちくん他准之　流布　三月ハ末ニ諸鳥乃古巣ニ
ゆくの事　鳥入雲ニかくり去心也　詩ニも哥
なり　ふを三月盡ニくるとり

山吹衣　表薄柳蘇裏
黄也　花鳥

裏山吹衣　表黄　裏
紅　同

櫻重　春也表白ニ
裏赤花

櫻薄様　ちくさなるとりくるのらまてもかの心を探ニ
訊（トラフ）ハ　新撰六帖ニ信實哥也帰（カヘ）也但雜ニくる色ニ

大槻氏原